
空白の話 ～カギ師～

牛を飼う男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白の話 ～カギ師～

【Nコード】

N6458E

【作者名】

牛を飼う男

【あらすじ】

夏ホラー2008～百物語編～参加作品。

藤尾正は工業高校を中退し、鍵師見習いとして鍵店に勤めていた。ある日、部屋の扉を開けてほしいという依頼が舞い込んできた。その依頼を受け、依頼主の家へと向かった藤尾は奇妙な光景を目にすることとなる…。

湿った現実忍び寄る恐怖と吐き気のするような絶望、そして蝕まれていった心。部屋の扉を開けた時、それは狂気となって外へと

叫んだー。

『空白の話』シリーズ第1話。

『ー何か中にいませんよね』

―千の物語があれば千の解釈が生まれる―

―この話を聞いたあなたはどんな解釈をするだろうか―

―例えばそれで人が怖くなっても―

―俺はただ物語を綴るだけだ―

『空白の話　～カギ師～』

「…このようにピッキングとは2本の工具を使って行うものでして、
けっしてドラマやアニメのようにクリップ1本でできる芸当ではあり
ません。それは完璧に作り物です」

どつと笑い声が聞こえてくる。目の前で私の話を聞いているのは、
鍵師養成講座体験入学にきたお客さん達だ。その面子といえば鍵屋
さんはもちろんだが、趣味で鍵開けの知識を学びにきている者もい
る。

当然、他人の鍵を勝手に開けることは違法なので、講習会参加希
望者には住民票や戸籍などの身分証明書を求めることとなる。それ
ほど厳密に行わなくてはならないのである。

ピッキング方法、鍵の作り方、鍵師のモラル、鍵師の今後の需要などを話し終わると、講習の終了時刻となった。ぴったりの時刻だ。最初は話しきれずに終わった時もあったが、最近はようやく慣れてきた。

「…以上で私の話は終わりです。もし鍵師としてご活躍されたい方はパンフレットの中にある願書を提出期限まで提出してください。わからないことがあればこのビルの一階に事務の者がおりますので質問等としどしお願いします。では、ありがとうございました」

参加者達は満足そうに帰っていく。鍵師としての訓練云々よりも私の話が面白いといって来てくれる人もいる。意外に自分はこういうことに向いているようだ。

どやどやと足音が鳴り響く中で、私は窓の外をふっと見てみた。5階から見える外はビルばかりだ。都会がコンクリートジャングルだと言われるのもわかる気がする。その上にはたくさんの人が足を踏み鳴らしているのだ。

(…今日も仕事は終わりだな…)

ぼんやりと考えていると、教室内にまだ人の気配がすることに気づいた。

「ーいや、面白い話だったよ」

声が出た方に振り向くと、そこには白髪の奇妙な男が1人座っていた。もうすぐ夏だというのに茶色いコートを着、長い前髪がはつきりとした目元を隠す。まるで白髪の間から覗かれているようではない気分はしない。

「このピッキング道具だっけ？ これは買うことはできんのかね？」

まだ20代前半と若そうだが変なしゃべり方をするもんだ。まあ自分もまだ30前半だが。

「申し訳ないのですがピッキング防止法ってのができてね。器具をお売りすることはできなくなっているのですよ。でも講習会には道具をお貸ししますので大丈夫です」

「そうかい？ それはよかった」

男はパンフレットを汚いリュックにしまつと帰る準備を始めた。

「あつ、そうそう。あんたに聞きたいことがあるんだ」

「なんでしよう?」

「何か面白い話はないかね? 怪談話、都市伝説、昔話でもいい。」

俺は物書きをやつててね。何かネタになるものを探しているんだ」

「へえ? 物書きですか?」

なるほど。どうりで変わっている。

「なんでもいいんだ。——人に言えない話でもいいよ」

人に……言えない話ね。

なぜか男の顔を見るとあのことを話したくなる。もう何年もたつがあのことを忘れたことはなかった。人に話そうにも話せなかった話——。

「それなら1つ……ありますよ」

「部屋のドアを開けてくれですか?」

仕事から帰ると早くも主任から依頼を受け渡された。当時私はまだ車の免許取りたての新人で、鍵師としてもまだまだ未熟な所があった。しかし、まだ認知度の低い鍵師という仕事にベテランは多くなく、仕方なく私が請け負うことになった。

さつそくワゴン車に乗り込むとそのまま依頼のあった家に向かった。工具やはしごなどはすでに車に積んであったので準備する手間はかからなかった。ただ、依頼の内容が奇妙だった。

普通なら車の鍵を開けてくれとか、玄関のドアを開けてくれとか、窓を壊してくれとか、そういった外部から内部へと入る依頼が多いはずだ。それなのに今回の依頼は家の中にある部屋を開けてくれという依頼だ。部屋の鍵をなくすことは滅多にないはずなのに。

車で1時間ほどかかっただろうか。道はコンクリートから土へと

変わり、風景はビルから田んぼへと変わり、空気は澱みから澄んでいく。こんな田舎がまだあったのかと驚いた。到着した依頼主のいる家も昔ながらの瓦張りで大きな屋敷だった。

車から降りると玄関のチャイムを押した。「ピンポン」と軽快な音が鳴ってすぐに女の声がした。

「…どなたですか？」

「あつ、鍵屋から来た藤尾です」

「あつ、ああ…そうですか」

陰気そうな女だと思った。

玄関から出てきた女はやはり想像どおり陰気そうな顔した女だった。もう50は超えているだろうか。化粧でごまかしているが深いシワが目元に見える。香水の匂いもきつい。

「私こういう者です」

身分証明書を女に見せると、女はジロジロとそれを見つめる。普通ならチラリと見るだけなのだがよっぽど警戒しているのだろうか。

「それであの…ご依頼の部屋は…」

「あつ、ええ…こつちです」

女は私を家の中へと案内してくれた。

屋敷の中はしなりと湿っていて、もう昼だというのにどこか薄暗かった。靴を見るとスニーカー、サンダルとどこにでもありそうな履物だ。女はこの屋敷に1人で住んでいるのだろうか。いや、恐らくこの家の主人がいるはずだ。女のおそろしい態度を見ればなんとなく余所者であることがわかる。嫁ぎにきたということだろう。玄関から家の廊下にあがると女はゆっくりと私の前を歩き始める。しばらくすると階段が見えた。女は階段に足をかけると上っていく。この家の外側から見て恐らくこの家は2階建てだろう。と、いうことは2階に依頼のある部屋があるということか。

「…んっ？」

階段を上っていると、ある物に目がいった。それは額縁に飾られてある賞状だった。それがいくつも階段の壁にかけられている。

よく見てみると『漢字検定1級』、『英語検定1級』、『珠算検定1級』、『スイミング1級』、『剣道1級』とどれも1級という文字が目に入ってくる。合格者の名前は同一人物だ。恐らくこの女の子のものだと思った。

すごいなと思った。私は小さい頃から勉強ができなかった。未だに九九すら危ないのだ。そんな調子だから中学の時、先生に進路指導室に呼び出されて高校は無理だとはつきり言われた。仕方がなかった。素行の悪い地元の工業高校に進学したが、やはり続かなかった。高校を中退し、ブラブラしていたところ、親戚の紹介で今の仕事にありつけたのだ。

「これはすごいですね」

「ええっ、よくできた子なんですよ」

女は私の視線に気づいていたのかすぐに反応してきた。顔が嬉しそうにほころぶ。自分の子供をほめられて喜ばない親はいない。

(…んっ?)

ふと、おかしい事に気づいた。その賞状の生年月日だ。賞状には何故か合格者本人の生年月日が書かれているものだが、その生年月日の日付がおかしい。その生年月日から年齢を計算していくと、もう30は超えているはずだ。

30にもなつてこんな賞状を堂々と飾られて恥ずかしくはないのだろうか？ まだ弁護士や税理士なんかの資格ならわかる。だが、どこを探してもそんな専門職の資格証明書は見つからない。私なら恥ずかしいから取つてくれと親に文句を言うはずだ。

そう思ったものの余計な事なので女には言わないことにした。何よりも女の雰囲気それを許さなかった。どこかそんな事を聞いてはいけないような暗黙の了承があった。

「…こちらです」

女は2階の階段から奥にある部屋に手を差し出した。平凡な扉だ。外側はよく綺麗に雑巾がけされている。太陽に反射して光沢が見える。

一応しゃがんでドアの鍵を調べてみた。もしピッキング対策がされているのなら開けるのは不可能だ。幸いにもそれはごく普通の鍵穴だった。

（これぐらいなら5分はかからないな…）

私は立ち上がると女と向き合った。

「それではこれから作業に入りますが、その前に鍵穴に工具をさすわけですから鍵穴の周りは傷ついてしまいますけどよろしいですか？」

「えっ、ええ」

「あと作業前にこの用紙にサインをお願いできますか？ 一応承諾を得なければならぬので…」

「……………」

女は規約の中身を見ることなくさっさと署名する。

「それでは作業します。そこで見ていてください。これぐらいならすぐ終わりますから…」

工具を開けるとピッキング用の工具を取り出した。まず一本をシリンドーにかけ、もう一本で鍵谷を落とす。これをガリガリと繰り返し、返すことにより鍵が回るという仕組みだ。
さっそく一度工具で鍵穴を探ってみた。

ゴソッ

「んっ？ ……」

今部屋の中で何か音がした。まさか中に人がいるのだろうか？ いや、それなら鍵を開けて出てくるはずだ。もしかするとペットなのかもしれない。

「あのっ ……」

私が女に聞こうとすると、女はいつの間にか傍から離れ、階段の所でジッと私の作業を眺めている。

「？ あのっ、中に何かいませんよね」

「…はい」

か細い声で頷く。それにしてもどうしてあんな遠くに避難するの
だろうか？ まるで部屋が開けられると何か危険なものでも飛び出
しそうな雰囲気だ。

(…気味悪いな)

早く鍵を開けて帰ろうと思った。

「ガチャガチャ」と工具を鳴らしながらシリンダーを回そうとす
る。

タタタタタッ

「!？」

今確実に音がした。何か駆けるような音だ。チラリと女を見ると、
女はまた少し遠くから私を見ている。

(…なんなんだ…)

タオルで汗ばむ手をふく。いつもならすぐに終わるのに時間がか
かる。再び工具を持つと鍵穴にさしこむ。

タタタタタッタタタッ

(…?)

やはり部屋の中から奇妙な音が聞こえる。不思議なことにそれは
不規則な音じゃない。よく聞いてみるとリズムがある。

タタタタタタタッ

(何かの音楽か…?)

もしそれがリズムなのなら何かの音楽が再生されているのだろう
か？ いや、これは木の音だ。こんな音はスピーカーから出ている
はずがない。

絶対に何者かがいるはずだ。動物がリズムを奏でるわけがない。
人間だ。

ガチャ

鍵が開いた。取っ手を回してみると少しドアが開く。私はそれ以

上ドアを開けず、女の方に向き直した。部屋の中は気になったが気味が悪かったのでやめた。

「鍵が開きました。それでは確認の方を…」

ギイイ…

ドアが勝手に開いていく。私の手はドアにない。それならなぜ開いていくのだろうか。

私は反射的にドアの隙間から部屋の中身を見ていた。そこには何か袋のようなものが重ね置きされていた。

卵が腐ったような臭い。肉が腐ったような臭い。汚物が発する臭い。

様々な悪臭がドアの隙間から溢れ出てきて私の鼻の中へ入っていく。すぐに私は気分が悪くなった。まるで悪意を封じ込めた箱を開けてしまったパンドラのように私は後悔し始めていた。

細く、薄い太陽の光が袋にこびりついた白カビ、黒カビを見せる。ガサガサと足が何本もある虫が、開かないはずのドアが開いて驚いて逃げていく。何かに首を絞められたような擬似感覚に陥る。

「…うつ」

さすがに限界だった。私は後ずさり、女の元へ行こうと思った。なによりも早くここから逃げ出したかった。

「！？」

ドアの隙間から何かが私を見ていた。

それはドアの端を持って、顔を半分出して私をジッと見ていた。気配がまったくしなかった。

白く濁った目が、原始人のような長い黒い髭と髪が、年寄りのようにシワだらけとなった手が、私の視界に入ってきた。

「うつ、わあああ！」

叫び声を上げ、私は部屋から逃げ出した。お代のことなどすっかり忘れていた。階段にいた女を無視して、玄関へと向かい、外へと飛び出した。

車に乗ろうとすると、半狂乱した男の声が聞こえてきた。
確か…こんなことを言っていたような気がする。

「なにやってんだよババア！！ 若くて綺麗な女を連れて来いよ！
！ もう俺には優秀な遺伝子を残すことしかできないんだよ！！！！」

女の悲鳴。

男の怒声。

何かが壊れる音。

ガラスが割れる音。

震える手を必死で抑えて、私は車のアクセルを踏んだ！。

ビルから外の風景を見つめる。外にいるのはコンクリートと人ばかり。きつと彼らの中にも禍々しいものが潜んでいる。

「…面白い話だった。その後どうなったんだい？」

白髪の男がノートを閉じるとそう聞いてきた。

「…あの後何度か女から電話がありましたますがすべて断りました。主任にも事情をきちんと話しましたからね。他の同業者にも気をつけるように呼びかけていたみたいでした。私は怒られることはありませんでした。主任も電話の内容がおかしいことに気づいていたみたいですからね」

白髪の男に話し終わると何か胸のつつかえがなくなったような気

がする。誰にも言えなかったことだ。主任には誤魔化すことで必死だった。

「まるで天の岩戸だな」

「…ああ、古事記の…」

「知ってるのかい？」

「その昔スサノオという乱暴な神がいた。そのスサノオの行動に怒ったアマテラスは天の岩戸に引き籠もってしまった。そして太陽を失った世界に禍々しい者が生まれた。困った八百万の神はアマテラスを何とか出そうと岩戸の前で宴を始めた。何かと岩戸の扉を開いたアマテラスは鏡に写った自らの姿を自分に代わる新しき神だと勘違いし、岩戸から引きずり出されたという話でしょ」

「そうさ。もしその男が自らの姿を鏡で見たら外に出てきたんじゃないかって思ってたね」

「…そういえば部屋の中には鏡がありませんでしたね…」

あの姿を鏡で見た男の反応はどんなものだろう。自分を見つめ直すことができただろうか？

「あつ、藤尾さん」

部屋の中に若い女が入ってきた。腰には工具をつけている。

「私今から仕事に行きますから」

「ああ、わかった。気をつけて」

「はい」

女はそれだけ言うと部屋から出て行った。

「へえ、女の鍵師もいるんだな？」

「ええ、別に女が出来ないというわけではないですからね」

「あの子は今から仕事かい？」

「そうです」

「まさかその家に行くんじゃないだろ？」

白髪の男は冗談でケラケラと笑った。しかし、藤尾は何もしゃべらなかった。白髪の男に振り向くことなく、外の人ごみを見つめている。

「――平和とは退屈なものですよ――」

たまには『人の開かずの扉』を開けてみるのもいいものだ――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6458e/>

空白の話 ～カギ師～

2010年10月8日15時12分発行